

Classification of Community Outsiders and Their Modification Based on Resource Ownership and Service Production in Community

地域再生におけるよそ者の分類と変容に関する研究

—資源所有と商品・サービス創出による分類モデルの提案—

敷田 麻実（北陸先端科学技術大学院大学）

Asami SHIKIDA (Japan Advanced Institute of Science and Technology)

Abstract

Over the past decade, community leaders and municipal authorities in Japan have viewed community development as a crucial measure to improve the local economy, enhance community activity, create employment, and increase social capital. It is also widely recognized that community development to require supports especially from an external party. Thus, in this paper, the concept of outsiders or external parties discussed in previous community development studies is reviewed. The author proposed four quadrants model explaining diversities of outsiders. The findings revealed that outsiders to the community including recent proposed “related population” can be classified into four segments by balance of produce and consumption and ownership of local resources. Finally, this study can contribute to the formation of community policy and the development of day-to-day local community management.

Keywords: outsiders, community development, mobility, related population, community participation

1. はじめに

近年、「モビリティ」と呼ばれるようになった人々の移動には、通勤・通学などの生活圏内での日常の移動から、就職や進学などを理由とした転出・転入まで多様な形態がある。総務省によれば、国内では年間 536 万人（2018 年）が市町村域を越えて移動（転居）している¹⁾。現在注目されている地方移住や移民²⁾も移動を伴う。また、観光も人々の移動を伴う活動であり、日本人の国内延べ旅行者数は 2019 年 1 年間で 5 億 8,710 万人と推定されている³⁾。現代社会では移動者が大きな存在となっている。

こうした移動者が観光客や移住者、移民として空間を移動し、移動先の社会に滞在や定住すると、受け入れるホスト社会からは一般に「よそ者」と呼ばれる。地域や組織に外部から入って来るよそ者は、自らの地域や組織とは性質が異なる文化や特性を持つ「異質な他者」であり、一方で興味を示しつつ、多くは理解できない相手として畏れられてきた。

一方、人の空間的移動は、地域社会に正の影響も与える。例えば地域振興やまちづくりと呼ばれる地域再生では、よそ者に強い期待や関心が寄せられている。特に人口減少や少子高齢化で衰退した地域では、地域再生への期待から「よそ者の役割」が注目されてきた。

2016 年以降は、特定の地域に継続して関心を持つよそ者としての「関係人口」が地域再生に貢献することも評価されている（田中 2021 ; 2017a）。ほかにも多様なよそ者による地域再生への貢献が議論されてきた。それは「よそ者が変革をもたらす」などの言説や期待があるからである。特によそ者と地域の内部者の差異を理由に、地域再生効果の発現を説明する指摘が多い。

しかし、内部者とどのような差異があり、何がそれを決定するか、どのような条件でよそ者効果が発揮されるかが分析できていない。また観光客から移住者まで、多様なよそ者を区別せずに地域再生への

貢献を一般化する例も多い。

そこで本研究では、これまで一括りにされることが多かったよそ者を、地域資源の所有と管理、そして商品やサービスの創出と消費を条件として分類し、その差異をモデルとして明らかにした。さらに、よそ者の内部化プロセスもモデルから考察した。

なお本研究では、敷田（2009）などの先行研究を参照した上で、よそ者を「地域や組織に一時的に帰属しながら、その内部にいる住民などの関係者とは異なる文化を持ち、内部のシステムに従いながらも、離脱や逸脱をする可能性を持つ存在」とした。

2. よそ者と地域

2.1 よそ者への注目

一般によそ者とは、自分たちとは異質な存在と認識される、主に地域外から来る人々を指している。柳井（2017）は、よそ者とは観光やビジネス客を含む来訪者であり、リピーターや移住者も含むとして、多様なよそ者の存在を示した。こうした多様なよそ者に関して、山口（1974）、赤坂（1992）、また網野（1996）など、多くの研究者が言及してきたが、その理由はよそ者が魅力的でありながら、一方で多様性に富み、捉えにくいからである。

田中（2016）は、よそ者とは社会の周辺に存在し、秩序を攪乱するが、一方で秩序維持のためにも役立つ矛盾した存在であり、近年は「他者」という表現に言い換えられてきたと考察している。社会学でも他者やよそ者は重要なテーマである。例えばベッカー（1993）による「アウトサイダー」の研究では、それまでの病理学的、否定的研究視点を批判し、アウトサイダーの「逸脱」を学習であるとして評価した。また小倉（2019）も、よそ者である「ボヘミアン」は規範に無頓着で、安定を嫌うと述べている。

場所との関係では、徳田（2020）が、よそ者は異郷性・匿名性・周辺性の3要素を持つと主張し、この組み合わせが多様なよそ者の性質を決定すると述べている。しかし、いずれも静的なよそ者の状態を表す要素であり、また3要素の独立性が示されてい

ない。

このように民俗学や社会学ではよそ者について多くの言及があった。こうした研究では、よそ者の持つ特性や由来、社会システムの中での位置付けなどが議論されてきた。しかし、地域再生の中でよそ者が議論されるようになったのは2000年代以降である。

2.2 地域再生におけるよそ者

よそ者の評価はこれまで変化してきた。「よそ者・ばか者・若者」という表現は、最近でこそ評価する際に使われるが、もともとよそ者に批判的意味を込めて使用することが多かった。帰属しないことによる「無縁」の自由さが1970年代に網野（1996）によって強調されたこともあるが、橋木（2011）が提示した「無縁社会」などのように、縁やつながりがなないことは否定的に扱われてきた（中森2017）。

その認識が変化したのは、普遍的な視点を環境運動に提供し、新たな視点をもたらす存在としてのよそ者を、鬼頭（1998）が積極的に評価したところからである。同時期に、前述したよそ者・ばか者・若者という言説が、地域再生現場で使用されるようになった。そして現在は、地域おこし協力隊や、関心が高まっている地方移住など、その地域と縁がなかったよそ者の来訪を肯定的に捉えるようになってきている。

さらに、2016年から注目されてきた関係人口も、地域の外部から内部である地域に関与する点で、よそ者として好意的に捉えられている（田中2021）。それは、交流だけが目的ではなく、また移住を終着点としてかわりを高めていく関係でもない、「新たなよそ者像」である（田中2017a）。このように現代の地域再生では、よそ者を肯定的な意味で用いることが多いが、それはよそ者による地域再生効果、つまり地域への貢献に期待しているからである。

2.3 地域再生に関するよそ者についての先行研究

よそ者への期待を反映して、近年は、地域再生に関わるよそ者に関して継続的に研究が発表されてきた（例えば、松村（1999）から樋田（2020）まで多数）。中でも近年注目されているのは、よそ者の持つ

以下を読み進めたい場合には、著者の私(敷田)までお問い合わせ下さい。